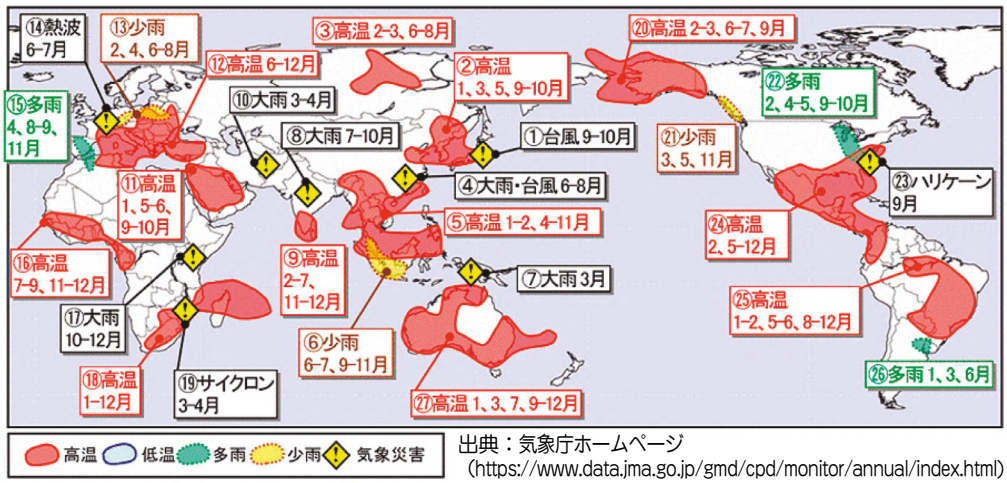
ひかり新聞
共生共助の社会をめざす
2022.2.1
No.44
一般社団法人
ひかりプロジェクト

生活スタイルの見直しを！

世界の主な異常気象・気象災害

発表日：2020年1月22日（2020年2月14日更新）



出典：気象庁ホームページ
（https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/annual/index.html）

地球温暖化、日本の現状と将来

近藤　豊（元気象庁職員／ひかりプロジェクト会員）

近年、多発する地球温暖化による広域あるいは局所的に発生する大雨の豪雨激甚災害に、みなさまも漠然と恐怖を感じておられるのではないでしょうか。

日本付近で急激に上昇する気温がもたらす気候の変化によって、これから何が起こるのか、文部科学省・気象庁から2020（令和2）年末に刊行された『日本の気候変動2020』から読み解いてみたいと思います。

地球の気温や降水などは、自然起源により数十年単位で変動をしています。この変動のトレンドから飛び抜けた時点を、シグナルが表れたと言っています。現在までの観測データを見ると、平均気温に関しては、1981（昭和56）年から1989（平成元）年頃に温暖化のシグナルが出ています。

日本国内の都市化の影響が、比較的小さい15地点で観測された年平均気温が、1898（明治31）～2019（令和元）年の間に、100年当たり1.24℃の割合で上昇。1910（明治43）～2019（令和元）年の間に、真夏日、猛暑日及び熱帯夜の日数は増加し、冬日の日数は減少。特に猛暑日の日数は1990（平成）年代半ばを境に、大きく増加しています。

また、大雨及び短時間強雨の発生頻度は増加し、雨の降る日数は減少。一方、年間または季節毎の降水量（合計量）には、統計的に長期変化傾向は見られていません。いずれも偶然ではない有意な傾向とされています。

◆ 21世紀末（2076～2095年平均）の日本の気候予測

気温、降水、台風（熱帯低気圧）などについて、2℃上昇シナリオ（パリ協定の2℃目標が達成された世界）と、4℃上昇シナリオ（現時点を超える追加的な緩和策を取らなかった世界）の2つのシナリオで、21世紀末を予測しています。

『気温』は、いずれにおいても21世紀末の日本の平均気温は上昇し、多くの地域で猛暑日や熱帯夜の日数が増加、冬日の日数が減少。4℃上昇シナリオでは、年間で猛暑日は約19.1日、熱帯夜は約40.6日増え、逆に冬日は年間約46.8日減少。

『降水』については、これまでに観測されている変化がそのまま継続し、大雨や短時間強雨の発生頻度や強さはさらに増加し、雨の降る日数は減少。また、初夏（6月）の梅雨前線に伴う降水帯は強まり、現在よりも南に位置する。

『台風（熱帯低気圧）』は、そのエネルギー源である大気中の水蒸気量が増加するため、日本付近における台風の強度は強まる。

◆ では、私たちはどうすればいいのでしょうか？

国連が2015（平成27）年に定めた、持続可能な開発目標17【SDGs】の中の、目標13「気候変動に具体的な対策を」では、温室効果ガスの二酸化炭素排出量を減らすために、私たち一人ひとりができること、例えば、

＊移動するときには公共交通機関や自転車を利用、または徒歩。自動車はアイドリングストップを心がける。
＊電気をこまめに消して、電力のムダを省くことや、クールビズ・ウォームビズなど、省エネ対策をする。
＊エコバッグやマイ箸を利用するなど、ゴミを少なくする。
＊ものを大切に使う。

といったことが、気候変動の影響を軽減することにつながっていくとしています。

みなさま、子どもたち、そのまた子どもたちの世代が安心して暮らせるよう、日々の生活スタイルの改善を始めましょう。

我が家の防災対策

太田　武明さん

2022年1月、東京都品川区在住、建具販売・施工会社の代表取締役社長・太田武明さんに、防災への取り組みについて伺いました。

品川区は、東京湾に面するベイエリア部分と丘陵地帯の住宅密集地域を有する地区です。

目黒川を中心に大雨等による河川の氾濫、京浜運河沿いでの高潮浸水のおそれがあり、また住宅地ですので、地震による家屋倒壊や住宅火災のリスクは、やや高い地域だそうです。

品川の地に生まれて50数年ですが、近年の大きな自然災害といえば、11年前の東日本大震災ですね。あの時はかなり揺れましたが、会社も自宅も大きな被害はありませんでした。

27年前の学生時代に、阪神・淡路大震災がありました。とにかく少しでもお役に立ちたいという一心で、震災発生数日後には、みなさんからご協力頂いた支援物資をワゴン車に満載して、先輩・友人と東京を出発しました。

大阪までは順調に進み、兵庫県に入るとこの世のものとは思えない異様な光景に目を疑いました。阪神高速に宙づりになったバス、倒れたビルや高速道路にも衝撃を受けました。24時間かけてやっと神戸にたどり着きました。

この1995年はボランティア元年と言われていますが、分からないながらも、物資の仕分け作業のお手伝い等できる限りのことを一生懸命にさせていただいたことを思い出します。

被災地を目の当たりにして、当時は家具の固定をして、非常持ち出し袋も準備しようなどと思っていましたが、現在、「災害対策を万全にしているか?」と聞かれると、「はい」とはなかなか言えないレベルだと思います。

我が家は、海抜15m程度の丘陵地帯で、浸水や崖崩れ等の自然災害の発生は、あまり経験がありません。

一般的に言う〝正常性バイアス〟が働いて、地震や台風は、よほどの規模のものが来ない限りは、大丈夫だろうと考えてしまいます。

各地の災害報道などで「まさかこの場所が、こんな被害を受けるとは…」という場面をよく見ますが、なかなか自分の身の回りで起こるとは考えにくいと思う、そのことがいけないのでしょうね。

でも、この地域は住宅地で、その特性として、火災や地震による家屋の倒壊については危険性を認識しています。

そういった面で、ここが決して安全な土地ではないことも理解しています。

ハザードマップに関しては興味があり、見たことはありますが、じっくり見ているわけでありません。ただ、家族で何か災害があった場合の集合場所は、近隣の小学校と決めてはいます。

確かに災害リスクを理解し行動することは大切ですね。実はかつて仕事上で、次のような経験をしました。

10数年前に、住宅新築の仕事を請負い、地盤の調査を行った際に、地盤がかなり脆弱であることが判明しました。施主の方に、建物支持のため、見積以上の杭打ちが必要ですと提案しましたが、既に契約が完了した後で、紆余曲折があり、結果的には費用持ち出しで杭打施工を行いました。

その数年後に東日本大震災が発生しましたが、その家屋はビクともせず無事でした。両隣の家屋は、倒壊したり傾いたりの被害があり、当初の調査や杭打ちが功を奏し、施主さんからは大変喜ばれました。

何も知らずに過ごし、災害に遭遇するより、事前に安全度合いを確認し、対応・準備していくことがいかに大切かということを身をもって体験しました。

最近、関東地方でも地震が頻発していますので、大規模自然災害に備え、自分自身はもとより、家族や会社を守っていくためにも、防災対策を考えることは重要ですね。

これを機に、区や都のハザードマップも参考にしつつ、防災に取り組んでいきたいと思います。

（取材・文責　大江　靖）

武明さん、長男・廉人（れん）くん、奥様・満江（みつえ）さん（七五三のお祝いにて）

熊本信通

恒例のクリスマス会開催

移動図書館おあしす代表　橋本信一

移動図書館「おあしす」と、木山仮設団地「スマイル子ども食堂」は、2021年12月25日、クリスマス会を行いました。

新型コロナウイルスの感染対策を行いながら、子どもたち、保護者、ボランティアスタッフなど、約20人が集まって、楽しいひと時を過ごしました。

この日のメニューは、いつものカレー100食。仮設団地の人たちや、近くの災害復興住宅に住む人たちにも配って、食べていただきました。

「温かくて、おいしいご飯が忘れられない」。これは、地震直後、体育館に避難していた子どもたちの言葉です。この言葉を受けて、仮設団地で「子ども食堂」を立ち上げました。当時幼かった子どもたちも、今ではそれぞれに成長し、調理のお手伝いができるようになりました。小学2年生の女の子は、クリスマスにちなんで、星型の人参を作ってくれました。

みんなでカレーを調理し、配り、おいしくいただいた後は、クリスマスケーキ作りにチャレンジ。スポンジケーキの上にフルーツや生クリーム、チョコレートソースをデコレーションして、思い思いのケーキが出来上がりました。「ママ、出来たよ」と母親に見てもらっている子や、友達同士で交換して食べたりと、みんな楽しんでいました。

福岡県の支援者からのプレゼント（お菓子の詰め合わせ）も、一緒に頂きました。

「牛すじの下処理は大変ですが、圧力鍋で煮込んだトロトロのすじ肉が入ったカレーは、とってもおいしいですよね。大好きです」「子どもたちも成長したんですよね。食べる量もずいぶん増え、作り甲斐があります」と、保護者やスタッフから感想が聞かれました。

熊本地震直後、熊本県下には110か所の仮設団地がありましたが、現在では、17か所に減少しています。そのうちの一つ、木山仮設団地は220戸ですが、入居されている方は30世帯ほどです。ずいぶん人が減り、普段は寂しい感じがしますが、子どもたちが仮設団地の中を駆け回ると、一気に、にぎやかさを取り戻します。

「仮設での暮らしは6年目になります。自宅が再建できるまでは、もう少し時間がかかりそうです」とおっしゃる方がいます。そうした方々の心に寄り添えるような支援活動を、今後も求めてまいりたいと思っています。

ひかりプロジェクトの支援者の方々には、子ども食堂、移動図書館の活動、そして、追悼行事に、毎年、変わらぬご支援を頂き、ありがとうございます。

自然災害はいつどこで起こるかわかりません。そういう意味では、ひかりプロジェクトを中心とした支援の輪が広がり、これまでの経験値を活かして、今後さらなる支援活動が展開していくことを望みます。

熊本で活動している私たちも、その輪に加えていただきながら、微力ではありますが、地域に根ざした活動を進めてまいりたいと願っております。

今後ともご支援頂きますよう、よろしくお願いいたします。

星型の人参

カレーの仕込み中

子どもたちもお手伝いしています

100人分のカレーを作ります

好きなものをトッピングして
クリスマスケーキを作っています

防災一口メモ（第7回）

火災時の対応――「初期消火の限界」を知っておこう

冬は火災の多い季節です。また、大地震の後、火災も多く発生しています。

今回は、火災時の対応について紹介します。

火災を発見した時にやるべきことは、「通報」「消火」「避難（避難誘導）」の3つです。どれを優先させるかは、火災を発見した時の延焼の状況によりますが、判断を誤ると命を落とすことになりかねません。

ただ、初期消火できる段階で避難してしまうと、被害を拡大させてしまいます。「避難するか」「消火するか」を判断するうえで重要なことは、自分で消火できる「初期消火の限界」を知っておくことです。

(1) 初期消火

万一、火災が発生したら「火事だ！」と大声で近くの人に知らせるとともに、火が小さいうちに以下の方法で消し止める。ただし、初期消火の限界は「災が天井に達するまで」で、天井まで燃え移るほど災が拡大していたら、何をおいても避難する。

① 消火器　台所など、出火危険の高い場所には消火器を備えておく。消火器の使い方は簡単だが、使い方を学んでおかないと、いざという時にあわててしまい、使えないことがある。地区の防災訓練などで学んでおこう。

② 水バケツ　たった一杯のバケツの水でも、大きな消火能力を発揮します。一気にかけるより、コップを使って少量ずつ何度も振りかけて消火する方が効果的。庭先やベランダに水バケツを用意しておこう。

ただし、天ぷら油火災の時は、絶対に水をかけてはいけない。かえって火災を拡大させ、大変危険。

(2) 避難

外出先の宿泊施設や飲食店に入ったら、まず、非常口と避難経路を確認し、消火器の位置なども確認する習慣を身に付けよう。

火災時の避難では、一酸化炭素などの有毒ガスを含んだ煙を吸い込まないことが重要。ハンカチやタオルなどで口を覆う、またできるだけ息を止めて避難する。

マンションの場合、玄関から避難できないときは、バルコニーに出て隣室との仕切り板は蹴破って隣りへ。また、避難はしごが備えられている時は、それを使って下の階へ。

自宅から避難するときは、服装や貴重品の持ち出しにこだわらず、できるだけ早く屋外に出る。一度避難したら、絶対に家の中に戻らない。何より、命が一番大切です。

（参考文献・『防災十教本』他）

防災出前講座準備中

ひかりプロジェクトでは、昨年・一昨年とオンライン防災講座を開催しました。会員の皆様に防災に関する様々な情報をお届けするためです。幅広く防災全般について学んでいただけたと思いますが、一定期間、夜の時間帯にオンラインで行ったため、参加できる方が限られました。

そこで、テーマを絞り、対面でできるだけ多くの方（10～30名程度）に参加していただければと、防災出前講座を企画し準備しています。「豪雨」と「地震・津波」災害からどうやって、自分や家族、周辺の人達の身を守るか！がテーマです。現在、講師陣が講座開催に向け準備を進めています。

２つのテーマから１つ、その地域にふさわしいものを選んでもらい、皆様周辺のグループの方々に対し、３時間程度の実習を含めた講座で、理解を深めていただきます。

開催できるかどうかは、コロナ感染の収束次第ですが、開催要領等を詰めて、３月末にはご案内をする予定です。

編集後記

地球温暖化について、近藤 豊さんに専門家の視点で書いていただきました。

気象庁ＯＢの近藤さんは、現在地元の山陰放送（鳥取県米子市）専属防災アドバイザーとして、テレビ・ラジオ等で活躍されています。

新型コロナウイルスは、年明け早々から、オミクロン株の感染が急速に広がっております。

この『ひかり新聞』がお手元に届く頃には、どのような状態になっているか分かりませんが、みなさまどうぞお身体にお気をつけください。

コロナ対策を行いつつ、地球温暖化対策や自然災害への備えも、みなさまそれぞれの場で、自分のできる範囲でできることから取り組んでいただければと思います。

ひかりプロジェクトは、これからも防災等についての情報発信をしつつ、災害復旧・復興支援活動も続けてまいります。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

（大江　靖）

タオルの備蓄について

近年、台風・洪水等の被害が全国的に多発しています。まずは人命救助が最優先ですが、その後の復旧作業等でタオルがとても役立ちます。

ご自宅で余っているフェイスタオル等の備蓄に、ご協力いただける方（グループ）は、ＨＰＡにご連絡ください。なお、タオルは新品と使用済みを仕分けして、皆さまのお手元で保管をお願いいたします。

被災地から要請があった場合には皆さまに送り先をご連絡いたしますので、よろしくお願いいたします。

（送料はＨＰＡで負担します）

ひかり新聞　No.44　2022年（令和４年）２月１日
発行者：一般社団法人 ひかりプロジェクト
〒401-0304　山梨県南都留郡富士河口湖町河口1975
電 話　0555－72－8191　　FAX　0555－76－6696
https://hikari-project.org　E-mail:hpa-office@hikari-project.org